

ただ好きだから

私がこれまでに所属してきた大学の数学教室には教員志望の学生が相当数いたのであるが、彼らに接してみると、その考え方にはある一定の傾向があるように思えてきた。彼らの多くが、人間に対する関心から教育にかかわりたいという人間重視の考え方をもっているのである。私が担当していたセミナーのある学生は、卒業後は数学の教員となって母校に赴任し、高校、大学と打ち込んできた野球部の指導者となることを目指していた。またある学生は、大学院入試の面接で修士卒業後の進路は教員志望であると言ったので、私が数学の教員にとって一番大切なことは何であると思うかと質問すると、「ひとりひとりの生徒の身になって考えてあげることです」と答えた。私は講義中に数学以外のことはあまり話さないのであるが、あるときどうしても気になって、次のようなことを言ったことがある。「皆さんはいま私から数学の話を聞いていますが、その内容は、私がどういう人間であるかということとは関係がありません。同じように、あなたがもし将来教員となって数学を教えるときに、生徒が興味をもつのはあなたの語る数学であって、あなた自身ではありません。」

しかし、世の中の意見では、私のような考え方は少数派に属する。世間が教師に要求することは多い。受験に役立つ知識を要領よく教えてくれることはもちろん、学校行事、課外活動、学級運営、生活指導では生徒ひとりひとりの身になって考え、その個性を尊重してほしい。同時に集団生活では秩序正しく、ひとつの目標に向かって協調していく喜びを教えてほしい。教員志望の学生は、ある意味社会の風潮に敏感で、このような教師像を自然に理想として描いているのではないだろうか。もちろん、これらのひとつひとつはどれも決して悪いことではない。それでもあえて私は、数学が好きで、数学がおもしろくて、それを生徒に教えたいとだけ考えている教員がもっとたくさんいてもよいのではないかと思うのである。

このような教師は世間からは批判されやすい。彼は受験にとっては一風変わった切り口を提供してくれるかもしれないが、人々の気持ちは加熱する競争とは裏腹に実は冷静で、勉強がすべてであるなどとは思っていない。数学がで

でもそれが何になるのですか？ 人生にはもっと大切なことがあるはずです。このように信じ込んできた人たちからの「数学は何の役に立つのですか？」という詰問に答えることは難しい。今のままでは、「ただ好きだから」としか言えない教師の居場所はますます狭くなっていくのだろう。今後数学に（あるいは他の教科にも）専門化した教員を増やすためには、教員全体の絶対数を倍増し、学校での役割分担をもっと細分化するような変化が必要になってくるはずである。では、はたして社会はそれを許容し、さらには求めていくようになるのだろうか？

昨今、消費は冷え込んでいると言われている。雇用の確保が緊急の課題だとも言われる。しかもそれは一時的なものではなく、今後も長く続いていく現象のように思われる。なぜなら、ものを買う必要がないからものが売れないだけのことであり、すべての人が働かなくても食べていける社会になったから働き口がないだけのことかもしれないからである。もしそうであるならば、長期的な視点に立てば、学問、芸術、文化、スポーツのような何に役立つのかを考える必要がない活動にこそ多くの人に関わる社会に変わっていくべきであるし、それらの活動の基盤である教育を支えている教員の質にも量にも一層の拡大が求められるべきだと思う。数学の教員について話を戻せば、学位取得者の人数は増えたが、就職できるポストが少ないというオーバードクター問題に対しても、たとえば高等学校の教員の職というものをよりアカデミックなものに変革してゆき、教育に携わりながらも一定の研究が続けられる時間が確保され、学会との交流の道も広がっていくのであれば、ある程度の解決策になるのではないかと思う。それは同時に、高等学校の教育の質を高め、また大学での学問を真摯なものとし、さらには大学院進学のための抵抗を低くするという点でも、高等教育全体の活性化に繋がるのではないだろうか。